

様式1

令和3年度学校評価報告書
渋谷区立松濤中学校

令和3年度 学校評価報告書

令和4年2月16日
渋谷区立松濤中学校

(1) シブヤモデルの実現（未来の学校に向けた学びの改革）

【ア】 自己評価

重点目標		①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ②ICT教育についての研修と推進 ③持続可能な開発目標（SDGs）への取組 ④グローバル人材の育成		
評価指標		取組内容	評価	今後の課題と方針
①	各教科において、授業が「分かりやすい」と回答した生徒が70%を上回る。	授業の導入部分では、生徒が本日の課題について興味や関心をもたせ、意欲的に課題解決ができるように工夫した。	B	タブレット端末を有効活用し、課題解決的な学習や個に応じた学習など、主体的に学習に取り組むための工夫を行う。
②	ICT機器を活用することで、生徒の考える時間や活動する時間を十分に確保できる授業を展開する。	校内研修において、ICT機器を有効に活用するための授業スタイル『Shoto Style』を作成し、実践した。	B	協働学習アプリ『ミライシード』を活用した授業展開をさらに実践する。
③	答えのない課題を追究することで、自ら進んで最適解を求めようとする生徒を育成するため、シブヤ科を実践する。	海外の生徒との討論や意見交換をとおして、自分の考えと比較しながら、新たな課題発見に努めることができるように授業を構成した。	A	ミクロネシア国際交流事業においては、コロナ禍で全員参加は実現しなかった。そのため、英語科の授業を活用した全員交流を今後も継続したい。
④	多様な文化や価値観に触れ、グローバルな舞台で活躍するために必要な広い視野と確かな国際感覚を養う。	English Camp、ミクロネシア国際交流事業、アトマイル事業をとおして、コロナ禍におけるALTとのコミュニケーションや海外生徒との協働学習を工夫して実践した。	A	対面における実施が困難な中においても、オンラインによる他国との協働学習が実現できたのは成果であった。あいさつや文化の紹介だけでなく、課題解決的な学習を主に進めていく。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

評価	学校関係者委員会の見解について
A	先生方のICT教育に関する研修や研鑽がよくわかり、今後も生徒のために一層タブレットの活用をしていただくことを期待したい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

(2) 安心・安全に挑戦できる環境について

【ア】 自己評価

重点目標		①いじめを許さない学校づくり ②インクルーシブ教育の推進 ③学校生活の基盤である学校施設の環境整備 ④生徒の成長と人権教育の推進 ⑤豊かな情操と規範意識の育成		
評価指標		取組内容	評価	今後の課題と方針
①	いじめ未然防止のために、多様性を認め合う態度を育成するとともに、相談しやすい環境を整備する。	昨今の新たな課題に対応するために、生徒会が中心となって、生徒自身がいじめについて考え行動できるよう「新 Stop!!いじめ宣言」を策定した。	A	学校いじめ防止基本方針（改訂版）をもとに、些細ないじめも見逃さない校内体制の確立と指導を徹底していく。
②	生徒に必要な配慮を教育相談委員会で検討し、他の生徒と共に学ぶことができる環境を整備する。	読むことに困難がある生徒に、定期考査にルビふりしたものを用意したり、タブレット端末で板書を撮影したりするなど、生徒に必要な配慮をしてきた。	B	本人とその保護者との確認や専門家のアドバイスをもち、課題や提出物への配慮、実施方法の工夫等をさらに検討し、全校で共有をしながら、適切な指導にあたる。
③	新しい時代の学びを支えるために安全・安心な生活の場を作り、感染症対策を徹底する。	安全を確保するために、毎朝の施設点検をし、朝礼等では安全に関する講話を実施した。また、毎日の消毒作業に加え、手洗いや換気の励行をした。	A	安全チェック表をもとに PDCA サイクルをしながら、適切に感染状況や校内環境を確認し、柔軟に対応していく。
④	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりを組織的かつ効果的に推進する。	学校行事や生徒会活動において、自分たちをより良くしていく意識をもたせ、生徒全員が関わっていく意識を高めることができるよう企画・運営をした。	A	学校行事の運動会などを通して、人権教育を推進する。教職員の研鑽を重ね、学校生活全般において、日々の指導を継続する。
⑤	道徳科の授業や様々な体験活動をとおして、人と関わる力や規範意識などを身に付けるとともに、思いやりの心を育む。	体験活動は、コロナ禍でも実施できるものを見付け実施した。授業では答えが 1 つではない課題について話し合いをしたり、解決策や合意形成、納得解を得られたりすることができる授業を展開した。	A	道徳科の授業では、各種の教材を通して、「思いやりとは何か」と考える学習を展開した。今後も話し合いを通じて自己決定をし、生き方について考えを深めさせたい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

評価	学校関係者委員会の見解について
A	いじめ防止基本方針にもあるように、いじめの未然防止に今後も組織的に取り組んでほしい。また、運動会などにおける異学年交流については教育的効果は高く、継続してもらいたい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

(3) 働き方改革について

【ア】 自己評価

重点目標		①校務 ICT 化の推進による教職員の負担軽減 ②学校業務の適正化と意識改革 ③スクールサポートスタッフの活用 ④校務分掌の見直し		
評価指標		取組内容	評価	今後の課題と方針
①	アプリを活用した欠席連絡などを充実し、電話対応業務を軽減することで、生徒指導や教科準備などの時間を確保する。	Home&School を活用した欠席連絡を年度初めの保護者会で周知した。また、学校、区や PTA からののお知らせは原則データで配信することができた。	A	個人面談の日程調査等のオンライン化、校務分掌の連絡事項を伝達する際のグループチャットの活用など、ICT を活用した校務の軽減を一層図る。
②	業務改善の推進と、次世代の学校づくりは、両輪として一体的に推進する。	毎週水曜日は定時退勤の日と設定した。また、諸会議は設定した時間を超えないように、生徒の清掃活動や下校指導の方法を見直した。	A	出退勤管理システムを活用した、在校時間の「見える化」を図り、教員の意識改革を一層図りたい。また、会議の精選と資料データを事前配布するなど業務改善を目指す。
③	印刷業務や行事準備など教員でなくても可能な業務をスクールサポートスタッフが率先してできる環境をつくる。	本校に配置されたスタッフは、任された業務をしっかりと行うことができた。業務内容を明確化することで、全教職員の負担軽減は拡充した。	A	教材の準備や片付けなどの授業補佐、校内掲示物の作成、行事や会議の準備・片付け、調査統計のデータ入力等、教員でなくてもできる業務を整理し、率先して行ってもらおう。
④	各教員の校務分掌について明確にし、効率よく、学校・学年の運営をする。	教務・生活・進路の3つの分掌のほかに、特別委員会など細分化され、1人の教員が複数の分掌に所属している。会議の回数が多く、会議を同時に開催できないなどの効率を改善するため、見直しをした。	B	1人の教員が1つの分掌を主担当として専念することができるよう、学校・学年行事などの担当を明確化する。時期的な業務集中を防ぐことで、学校運営の効率化を図りたい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

評価	学校関係者委員会の見解について
A	スクールサポートスタッフの配置拡充や活用の充実をすることで、先生方の働き方がより一層改善することを期待したい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

(4) 家庭・地域との連携について

【ア】 自己評価

重点目標		①学校運営協議会（SAMS 協議会）との連携と協働 ②保護者との連携強化 ③社会に開かれた教育課程の実現		
評価指標		取組内容	評価	今後の課題と方針
①	学校運営協議会では、学校や生徒がどのような課題を抱えているかなどの実態を共有できるよう、適切な情報発信に努める。	対面開催または、オンライン開催において、適時に適切な情報を提供した。また、運動会や渋谷タブレットの日の参観については工夫して実現した。	A	授業や学校行事の参観はできる範囲で実施をした。今後は、オンラインによる参観などを視野に入れ、学校運営や生徒への理解を深めてもらい、様々な課題の共有化を図る。
②	学校・学年通信やホームページ等を活用して、適時に適切な生徒指導に関する情報発信に努める。	電話連絡、学年通信などを活用して生徒の良い点を報告したり、学年通信の返信欄に保護者からコメントを記入してもらったりして、日頃から保護者の意見や情報を得やすくする関係づくりに努めた。	A	各学年、定期的に学年通信を発行した。また、保護者からのコメント欄を活用することで保護者の意見や感想を常に傾聴し、学年・学級経営に即時に生かすことができた。
③	未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むために、未来の学校の果たす役割やその姿を共通理解する。	今年度は夏季研修会として熟議を予定していたが、感染症予防のため実施できなかった。そのため、メール等で情報共有を図り、意見交換をした。	B	開かれた教育課程の実現を目指すべく、未来の担い手となる生徒と地域が直接お互いの役割を確認する機会を設け、協働した学校運営を目指す。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

評価	学校関係者委員会の見解について
A	コロナ禍で対面する機会が少なかったが、学校は工夫して参観する機会を設けるなど広く意見を傾聴し努力してきた。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

(5) 特色ある教育活動について

【ア】 自己評価

重点目標		①英語教育重点校としての取組 ②渋谷区研究指定校としての取組 ③学習者用デジタル教科書のモデル校としての取組 ④体力向上に向けた取組			
評価指標		取組内容	評価	今後の課題と方針	
①	英検 IBA の結果が、第2、3学年については「英検3級程度以上」、第1学年については「英検4級程度以上」が、70%を上回る。	パーシャルイマージョンの考えに基づき、英語教育重点校としての役割を認識し、日々の実践を重ねた。英検 IBA の結果については、第2、3学年は80%以上、第1学年では69%に達成した。	A	英語教育重点校として確立したノウハウを活用しながら、ALTにより力を発揮してもらえるよう、英語教育全般を見直す。	
②	研究テーマを「学びの意義を理解し、自ら学び続ける生徒の育成」と設定し、学習をとおして自己の成長を実感する自己有用感をもたせる。	年間3回の研究授業を実践した。今年度は、学習してよかったという充実感や満足感をもたせることができるよう研究した。生徒間で協働して学習することで考えが広がり深まりを感じることができるよう、研究した。	B	協働学習のツールとしてのミライシートとクラスノートの活用を推進する。今後それぞれの特性をいかした学びの展開を検討したい。	
③	5教科のデジタル教科書を導入することで、授業の中で生徒がタブレット端末を文房具のように使いこなし、主体的に活用することができる生徒の育成を目指す。	デジタル教科書をプラットフォームとして、多様なICTを関連付けた。また、授業全体の中で紙とデジタルを適切に組み合わせることで、授業やその指導計画の充実、見直しをすることができた。	B	デジタルとアナログのそれぞれの良さを考察し、生徒の学びが一層深まるように今後も研鑽を重ねていく。	
④	体力測定において、昨年度の結果を踏まえて、持久走と50m走の項目について都の平均値を上回る。	始業前に朝ランニングを実施した。緊急事態宣言下は実施を見合わせるなどの制限はあったが、多くの生徒が自主的に取組むことができた。その結果、1年男子持久走以外は都の平均値を上回った。	A	運動を苦手と感じる生徒も授業や朝ランニングなどに積極的に取組むような環境の醸成に努める。	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

評価	学校関係者委員会の見解について
A	英語教育重点校としての役割を果たすべく、地域、学校、保護者が共通理解し、協働してきた成果が明白に表れている。また、朝のランニングについてはぜひ継続し、体力向上に努めてもらいたい。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成